

「私を呼んだのは君か？　良い魔法陣だ。いや、ほころびのない陣など何百年ぶりだろう。近頃は本物の魔法使いもすつかりいなくなってしまったからな」

暗い、石造りの部屋だった。光源と呼べるものは各所に配されたろうそくの曖昧な光と、中央の魔法陣が放つ淡い魔力光ばかりだ。後者はやがて消えていった。

陣の中央に大男が立っている。纏っているのは巻き付けた腰布のみだ。顔の彫りは深く、体は赤銅色で、岩から削り出してきたような筋肉の鎧に覆われている。腕は丸太のようだ。両脚の造形のしなやかな力強さには、躍動感がある。

絵に描いたような偉丈夫であり、パチュリーの好みと驚くほど一致していた。だからといって心を許したりはしない。なぜならば、彼は悪魔なのだから。悪魔の容姿は自由自在。当然、こちらの嗜好にあわせた姿になって、油断させようとしてくる。

「御託はいいわ。さっさと契約するわよ」

「もちろん。優れた魔法使いとの契約は、我々悪魔にとって最高の喜びだ」

にこやかな口調と友好的な態度とは裏腹に、彼は魔法陣をなぞり続けている。少しでもほころびがあれば、すぐさま魔法的な束縛から抜け出してこちらに攻撃してくるだろう。むろん、パチュリーはそのようなへまをする未熟者ではない。

「私の望みは知識よ。本では得られない魔の道の知識」

本の虫と揶揄される彼女だからこそ、書物の限界を知っている。つまり、載っていない知識を得ることはできない。広大では済まない紅魔館の大図書館でさえ、彼女の知りたいたすべての物事を収めるには到底足りない。

魔の道について知りたければ、魔の存在に尋ねるのが道理だろう。古い魔導書を紐解き、彼を呼び出したのは、そういうわけだった。

「対価は？」

「ふむ、そうだな、良き魔法使いと出会えた喜び分を割引して考えるよ」

嘘だ。彼らは望みに対する代価を厳密に定めている。割引など一切ない。そんなことも知らないアホをひっかけるためのブラフだ。

もつとも、心配はしていない。大抵のものは、咲夜経由で手に入るからだ。

「ではこうしよう。私と性行為に及んでくれ」

「……はあ？」

これには驚かずに、というか呆れずにはいられなかった。そんなことを要求する悪魔は初めてだった。獣と性交渉したいと考える人間が少数派であるのと同じような意味合いで、人間を抱こうなどと考える悪魔は少ない。こいつはどうやら、少数派らしい。

「言っておくが、本気だぞ？ 悪魔は契約に関して嘘をつかない」

「だから驚いてるのよ。……まあ、いいわ。体を開くだけでいいなら安いものだし」
物を用意する手間も省ける。いいことづくめだ。パチュリーにとって、貞操は探究の前に立ちはだかる概念ではない。

「交渉成立だな。では早速、脱いでくれるか、まずは君の裸が見たい」
「はいはい」

促され、パチュリーは大したためらいもなく衣服に手をかける。

終日図書館に籠って一步も動かさず本を読んでいる、言い換えればひたすら栄養を蓄えているがゆえの、肉付きの良い——良すぎる肉体だ。なだらかな肩の稜線から下へ向かうと、まずあからさまに豊かな乳房が目につく。見るからに柔らかなたつぷりとした双丘は両手にも余るほどで、収穫期の熟れた果実のように、己自身の重みでやや下向いている。

その先端は、本来であれば突起と表現されるものであるが、彼女の場合は突でも起でもなかった。やや濃い褐色の乳輪は広く盛り上がっているが、乳首そのものは埋もれている。いわゆる陥没乳首であり、指先で穿ちたくなくなるような穴が両乳房の先端に存在している。万人の好みに合致するものではないだろうが、受け入れられる人間に対しては強烈な魅力を放っている。

さらに下に向かうと、腹に行き着く。光の刺さない値図書館で過ごしているがために、

肌は透き通るほど、あるいは病んでいるかのように白い。朝一番の雪原を思わせるそこは、やはりたつぷりと肉を蓄えている。さながら肉の布団だ。指で簡単につまめるだろう。

横に線を引いたような臍から指三・四本下の叢は、もともと毛の濃い体質であるところに、パチュリー自身の外観への興味のなさゆえろくに手入れもされずに放置されている。今ではすっかりふさふさ、もといぼうぼうと生い茂って秘めやかな三角地からはみ出していた。よく手入れされた陰毛は庭園を連想させるが、彼女のはそのような評価とは無縁、ないし真逆、いうなれば密林だ。

尻もまた、たつぷりと肉をたたえている。両の尻たぶは身を持って余し、互いに押し合い、はみ出して盛り上がっている。むっちりという言葉すら不足であるような部位は、歩けば乳房のようにゆさゆさと揺れ、目を楽しませるだろう。腹が布団ならば、これは肉の枕だ。尻と太ももの間に、はつきりと線が浮かび上がっている。尻肉の豊満さゆえのことだが、太ももも負けず劣らず肉に満ち、鳥類のそのように太くむちりむちりと張りつめている。もつとも、鳥のそれが筋肉からなるのに対し、彼女のは脂でできていたが。

総じて、ふくよか——控えめで婉曲的な表現を用いるならば。それが彼女の肉体だった。男は顎を擦りながら、こちらを眺めている。あらわになつた肉体に彼がどのような反応をもたらしたのか、パチュリーは察した。彼女でなくとも察しただろう。巻き付いた腰布

の一部が露骨に膨らんでいる。それにしても大きい。布越しに見てもわかるほどだった。「素晴らしい。食らいがいのある、美しい肉体だ。だが、君がこちらに来てくれないと、手が出せないのだが」

「それはいいけど、乱暴にしないでよ」

「できないのは君が一番わかっているだろう？ 陣はどうやら完璧だ。小指の先端すらも出せやしない。いやはや、降参だ。見事なことだよ、本当に」

促され、魔法陣に足を踏み入れる。危険はない。触れられる距離であっても、陣に瑕疵がない限り、彼はこちらに危害を加えられない。

男はおもむろに腕をつかみ、こちらの身体をぐいと引き寄せる。そのまま腕の中にかき抱いてきた。筋肉の形のはつきりと浮かび上がる、太い腕だ。胸板は上等なステーキ肉のように分厚い。地肌で感じる男の体温は、熱いほどだった。

腰に手が回され、乳房に手が這わされる。乳肉の柔らかさを試しに味わってみるように、わずかに指が沈み込む。

彼の表情は獣を想像させるものだった。女にペニスをねじ込み精を吐き出すことの興奮を覚えているのだろう。

男は腰を撫で回しながら、手を両脚の間に挟みこもうとしてくる。高まるのは勝手だが

——身じろぎして抗議する。

「このままするつもり？」

「まぐわいに情緒を求める主義かね？」

「そうじゃなくて、足腰が辛いつて言ってるの」

「ああ、なるほど。……ならばこれでよかろう？」

芝居がかった動作で男が指を鳴らすと、純白のシーツの敷かれた簡素なベッドが現れる。紅魔館で使われているものほどではないが上等だ。そのまま、腰に回した手をクツシヨンにするような形で押し倒された。彼女の重量感のある肉体も、彼は軽々と扱ってみせる。

男はパチュリーに覆いかぶさりながら、目の前に放り出された肉体をまじまじと眺める。張りつめるほどに肉を蓄えた、豊満の象徴のような肉体を。

「好みみの肉体だ、最高じゃあないか、くく、楽しみだ……」

たるむわき腹から肋骨に沿って指が這い、重力に従って寝そべっていた乳房をなぞる。鋭い爪をしている——見とがめると、それはすぐさま引つ込み、深爪寸前まで切り揃えたものをやすりで丁寧に削ったような形に変わる。悪魔にとって、姿など自由自在なのだ。すくい上げるように触れ、揉みしだいてくる。弾力を犠牲に柔らかさを極限まで高めたような乳は、彼の指を素直に受け入れ、形を変えた。

もう片乳に、彼の顔が近づく。唇から、血を思わせるような色の舌がのぞく。ふっくら膨れた褐色の乳輪の先端にある窪みを、穿るように刺激してくる。

「ッ……ん、く」

乳穴とでも呼ぶべき窪みの中を、蛇のように尖った舌が探る。内部の財宝に触れられるたび甘い刺激が訪れ、パチュリーは小さな声をこぼす。

ごつごつとした手が、両脚の間に入り込んでくる。生い茂った密林を指先がかき分け、秘められるべき貝に触れる。びらりとほころぶ外陰唇の輪郭を確かめるように、なぞってくる。陰毛の擦れる音と、彼の唾液の音がする。

「ふうッ」

ねっとりした水音が加わり始める。水飴を練る音に似ている。奥から溢れてきた蜜が、指先にこねられている。それに応じて、パチュリーの声も熱を帯びていく。

十分に濡れそぼったのを見計らって、中指が鉤状に折り曲げられる。ゆっくりと体内へ入り込んでくる。最初は、膣内の様子を確かめるように。次第に、女を感じさせるための手つきへと変わってゆく。敏感な肉褻が擦られ、そのたびに声が漏れる。親指が肉の豆を揉みつぶすように刺激してくる。

「アッ、は、ああ」

乳輪の窪みの内側で、先端は充血し膨らみ始めている。彼は小指の先端をねじ込んで、しこりを解すように乳首を刺激している。口で愛撫している方も同様に、唾液をたっぷりまぶしながら、そこから甘い蜜でも出るといふかのようにねぶってくる。

「アッ」

そこだ。

女穴をくすぐり回していた指が、いいところに触れる。入り口から比較的浅い位置の、腹側だ。そこがパチュリーの最も弱いところだ。そこがいい、と伝える必要はなかった。指がもう一本侵入してくる。十分解されていた彼女の肉穴は、すんなりそれを受け入れる。人差し指と中指とが、組み合わせあってそこを擦り始める。

「はぁッ、あ、は、あぁッ、ッ、イイ……」

シートを握り、身体をくねらせる。にちゃっ、くちゃっ、濡れた肉を捏ねる妙に耳につく音が、石造りの部屋に響き始める。いつもの無感動な、書かれていることをそのまま読み上げるような声とは違ったものが、喉の奥からこぼれ落ちる。

この行為はそもそも、魔の道の探究のためにと、無関心に始めたものだ。嫌ではないが、したいと思っていたわけでもない。しかし今はどうだろう。腹の奥が熱くなりつつある。相手もおらず、そんなことにうつつを抜かす暇があるなら知識の探究をしたい彼女に

とつて、それは久々に味わう感覚だった。

彼女はいくらか、前向きになっていた。この悪魔、悪魔というからにはさぞ痛く苦しく乱暴なセックスをするのだろうと思っていたら、そうでもないらしい。むしろ紳士的で、こちらを楽しませようとしているようだ。好きに姿を弄れるだけあつて容姿も好みだし、抱かれる相手としては上等だろう。

ならば、この行為をただの代価としてでなく、研究の息抜きとしてとらえ、久々の感覚にしばし溺れてみるのも悪くないのではないか。そうした思いが、行動に現れる。重たい腰が浮かび、指の動きに合わせるようにくねり始める。膣はちゅうちゅうと吸い付いて、快感を味わおうとしている。膝は震え、太ももの筋肉がランダムに収縮している。

「おっと……そうだ、もつとも基本的な前戯を忘れていたよ」

「ンムッ」

彼は乳房から口を離すと、不意打ちのようにこちらの唇を奪ってきた。舌が入り込んでくる。とつさに噛み切りそうになったが、こらえる。

「ぐちゅ、ちゅる」

彼の舌は、乳房をねぶっていたときは蛇のように細かったはずだが、今はヒルを大きくしたような形状になっている。そんなものが口中を這いずり回り、あちこちに己の粘液を

残しているわけだが、不思議と嫌悪感は見えなかった。むしろ快感がある。

「ぢゅ、ぶ、ぐぶ」

「くツ、ん、う、ん」

接吻は快感を得るためというより、互いの想いを伝えるために行う行為だと考えていた。そういつたことに興味のないパチュリーに、キスの経験など数えるほどしかない。それも、戯れ程度に交わした、唇同士を重ねる程度のものであった。ゆえに彼女は驚きを覚えていた。口交でも、立派に気持ちよくなれるものなのだ。

彼の舌が、こちらの舌に絡みついてくる。絡みつくというのは愛撫していることの比喩ではない。文字通り、そういう形状になっているのだ。さすがに悪魔といったところだ。しかし、そんなことはどうでもいい。今は、この心地よい感覚を、もっと味わうことだった。「ンツ、ンツ、んう、ツ、ん」

知識や理性によってではなく、より本能的なものに突き動かされ、彼女も舌を動かす。ぢゅくつ、じゅぶと、空気と水分をたっぷり含んだ音が、頭の中に響き渡る。音源が脳や耳に近い分、なおさらはつきりと感じられる。

「ツく！ ううん」

それは甘く蕩かすような感覚だった。そこに不意に、電気でも走るような、ソリッドな

刺激が走る。体内に忍び込ませたままだった指を、彼が再び動かし始めたのだ。ざらつく天井を擦られ、会陰から太ももにかけてのあたりがきゆうきゆうと収縮する。

「んふう、ンツ、う、う」

上半身と下半身、それぞれが暖かい泥の中に浸かっているように感じられた。自身の内にあるものがどろどろと融けていくような感覚を覚えたが、不快でも苦しくもなかった。むしろ対極にある。強い酒でも決めたときのように、頭が痺れている。蕩けるような心地よい感覚だ。腰がゆつくりと、石臼をひくような動きをする。

唾液が送り込まれてくる。異種の体液を、彼女は喉を小さく鳴らし嚥下していく。甘露に思えた。飲み下すたび、官能が高められていくように感じられた。

「ふは……ああ」

幸せな時間だった。しかし、いつまでもは続かない。唇は離れ、指は引き抜かれていく。唇にかかった唾液の糸を指先で拭いながら、男はにやりと笑う。

「しゃぶってもらう前に、接吻でもしておこうと思つてね、気に入ってくれたようだな」
しゃぶる——彼のモノを。性感に浮かされた頭に、男の言葉が響く。

男はベッドの上に立ち上がった。彼女も、上半身だけ起き上がった。座高の関係から、おのずとソレが眼前にやつてくる。

「ああ……なんて、大きい……」

思わず呟いた。実際、それはすさまじかった。布を巻きつけていることが、隠すという目的をまるで達成していない。むしろ、巨大なシルエットをくつきりと浮かび上がらせることで、逆効果になっている。

たいていの悪魔は、召喚者に最も好まれるような姿で現れる。彼も多分に漏れなかった。ということとは、目の前のコレも、自分が最も好むような形をしているのではないか。最も、気持ちよくなれるペニスなのではないか？

「ッ、ああ」

男のもとにひざまずきながら、彼女は知らず知らず、両腿をこすり合わせていた。体奥からやってきて太ももまで溢れた蜜が、にちっ、にちゃ、と音を立てる。快樂への期待が、そうさせていた。

「釘付けじゃないか。分かるよ、私の前に立つ女は、皆そうなるのが相場だからな」

男はそう言って笑う。普段の彼女ならば、何を馬鹿なことをと呆れかえっていただろう。だが、今の彼女は、普段と呼べるような状態にない。

「そら、ぼうつとしていても話が進まないだろう？ 君が脱がせて、満足させるんだ」
脱ぐくらいは自分でしなさいよと、本来ならバツサリと切って捨てていただろう。だが

今は、そんなことなど考えつきもしなかった。包み込まれたソレが、布というフィルタを貫いて容赦なく振りまく香氣に、あてられていた。促されるがまま、腰布に手をかける。結び目を解き、取り払う。そうして、彼女は息を呑んだ。

「ああ……」

感嘆のため息すら零れ落ちるほどだった。彼のモノは、それほど雄々しく、猛々しく、凶悪なまでにエラを張らせ、むせかえるほどの雄の臭気と、蒸気を放っていると錯覚するほどの熱気をむんむんと振りまいていた。おどろおどろしい血管がぐねぐねと這いまわる、太くえげつない肉幹の根元では、中身がたっぷり詰まっているだろう木の実二つが、己の中身を解き放つ瞬間を今か今かと待ち構えている。

パチュリーは内心、巨大な期待とわずかな恐怖を覚えていた。そのどちらも、まったく同じ言葉で表現できた。

こんなモノの相手をしてしまったら、いったいどうなってしまうだろうか？

それがパチュリーを動かし、また躊躇させた。矛盾した感情によって彼女がとった行動は、とりあえずソレに触れるというものだった。

「熱……っ」

握ったわけではない。ほんの少し、肉幹に指先で触れただけだ。愛撫ですらなく、本当

にただ接触しただけだ。それだけで、指先を火傷しそうに感じた。いかに相手が悪魔でも、今は人の形をとっているのだから、人の体温から大して離れはしないはずだというのに。

彼女は、勃起したペニスがこれほどたくましく熱いものなどとは知らなかった。本に書いていないことを、彼女は知らない。ゆえに、がぜんソレに対する興味を抱く。

「手でか。意外と奥ゆかしいな。さあ、扱くんだ。それが君の仕事だ」

それが自分の仕事——その通りだ。彼女は小さく頷いた。女としての本能が同意した。肉幹に指を絡める。蒸れていたのか、じつとりと湿っている。彼のモノは、女を穿つという強烈な欲望に基づいた熱を孕んでいた。触れているだけでも、その熱が手から神経を通って脳へと伝わってくるように感じられる。

ゆっくりと、扱き始める。にち、にちつと、鼓膜の裏側にへばりつくような小さな音がする。音に耳を犯されているような感覚だった。

「はあ、はあ、はあ」

手のひらから伝わる熱さに、脳を直接刺激されているようだった。呼吸は乱れ、思考がまとまらない。自分が何をしているのか分からなくなりながら、行為に没頭していく。

これが、後で自分を貫くのだ。こんな、こんなものが。今まで張型で自慰をしたことはあった。けれども、あんなものは所詮まがい物だと気づかされた。何が素材だとしても、

この熱さは再現できないだろう。本当のセックスというのは、いったいどれほどの快感を、自分にもたらすだろうか？

期待は、行動として現れる。空いているほうのもう片手が、持ち主の股座へと伸びる。先ほどまで優しく馴染み解されていた秘貝は今やとろとろと蜜を溢れさせ、貫かれるときを待つ淫らな女穴に成り果てている。そこに、指をくぐらせる。

「アはッ！」

背筋が震える。快感が体を巡った。彼女はすぐ、その代替行為にも没頭し始める。

無論、自分が本来すべきことを忘れたわけではなかった。しゅつ、しゅつと、リズムよく肉棒を扱きたてている。女所帯の紅魔館で、部外者の立ち入らない大図書館に籠って暮らしているのだから、男性との経験などあつてないようなものだ。それでも手つきは、ずいぶんと手慣れたものだった。女の本能に、あらかじめ備わっている性技だ。何より、熱心だ。その熱心さが、彼の反応を引き出した。

「おお、おお……いいぞ、その調子だ」

亀頭から、透明な汗がにじむ。実際に見るのは初めてであつたが、彼女はそれを知っていた。先走り汁というやつだ。勃起が性的興奮の証拠なら、これは性的快楽を覚えていることの証拠であり、射精の前段階だ。

一体どのような味がするのだろうか——冷静に考えてみれば、他人の体液などが美味であるはずもない。けれども今の彼女は、それがたとえようもなく美味なものである確信を抱いていた。本能が知らせていたからだ。とはいえ、仮に確信しておらずとも、結局は味わずにはいられなかっただろう。パチュリー・ノーレッジは、知識を追い求める者だ。赤黒く張り出した亀頭の先端、小さく開いた鈴口に、赤い舌が伸びていく。粘膜同士はじりじりと近づいていき、やがて、触れる。

「ッ——あはあ」

仮説と検証は、知識の探究の基本にして最も重要なプロセスだ。先走りが美味だという、直観に基づいた仮説は、たった今実証された。

結論から言えば、正しかった。味覚は大した情報を伝えてこなかった。だが彼女の脳は、自らがソレを味わったという事実に対し、多大な興奮とえもいわれぬ幸福感を覚えていた。聡明な彼女をしてすら、一発で中毒患者に仕立て上げるほどだった。

「れ、ろお」

もつと味わいたい、味わわなくてはならない。取りつかれたように、舌先で鈴口を舐め回していく。しかし先走りというのは、ほんの少ししか分泌されないものだ。少なくとも、彼女が満足するだけの分量には全く足りない。それでも彼女はあきらめなかった。持前の

聡明さでもって、どのようにすればよいか考えた——先走りとは、男が快楽を覚えているがゆえに分泌されるものだ。ならば、もつと快楽を覚えさせればいい。

「なんだ、舐めるだけか？ ついでにしゃぶつてくれてもいいんだがな。そのほうが話が早いだろう？」

助け舟を出すようなタイミングで、彼が言う。これを、しゃぶる？ なんて素晴らしいアイデアだろうか。そうすれば、彼の覚える快楽はより大きく、はなはだしいものとなる。となれば、あの至福の露をもつと味わえる。それに——。

ごくりと、喉が鳴った。コレは、手を通じてすら、圧倒的な熱量でこちらの官能を燃え上がらせてきた。もし、手でなく、人体において際立って敏感な口という粘膜で触れようものなら。本当に、狂ってしまうのではないか。

狂う、というのは、あまりポジティブな意味の言葉としては考えられない。けれども、今この瞬間の彼女の思考において、そこにネガティブな思いは存在していなかった。狂うというのはあくまで、無限大の期待を示す比喩でしかなかった。

「ああ——」

それゆえに、提案が承認され実行に移されるまでの時間は、きわめて短いものとなった。魔法を唱えるときですらばそぼそと囁くようにする彼女が、普段とは対極的に、あんぐり

大口を開けた。知識と日陰の少女らしくもない、品のない姿だ。しかし、それでもせねば、幼児の腕ほどもあるソレを迎え入れるのは無理というものだった。目的達成の前に品格を気にするようなたちではないし、そんなことを考えていられる精神状態でもなかった。

興奮で粘ついた唾液が、口中で糸を引いている。まずは、舌先で亀頭に触れる。先ほどたっぷり舐めまわしたため、唾液でぬらぬらと光っている。そこを起点に、サメが獲物に食らいつくときのようになり、かふりと、一口でそれを迎え入れた。

「——ンッ！」

途端、口中で爆発が起きた。雄臭の爆発だ。それは口中を、そして頭の中を白く染める。したことといえば、ペニスを啜えただけだ。それだけで彼女は、軽いアクメに達していた。「ン、ふう、うううう」

「ははは、いい顔だな、君自身に見せてやりたいところだ。鏡がないのが悔やまれるな」
そうなのだろうな——そんな考えが脳裏をよぎった。こんなどろどろに蕩けきった状態では、理知的な表情など浮かべられるはずもない。悪魔とは、どんなに友好的な態度でも、こちらを油断させようとあの手この手を弄してくるものだ。だから隙を見せるのはご法度、魔女としての恥にあたるのだが、そんなことは全く気にならなかった。今は、それよりも、大事なことがあるではないか。

「ングツ、ぐぶ、んご——ツぐ、ちゅぶ、ぐぼつ、ずるッ」

頭を前後させ、肉幹を口で扱き上げる。窄めた唇から、ぐぼぐぼと間抜けな空気の音が響く。熱心なフェラチオだった。

「ふーッ、ふうっ、んぢゆる、んふうッ」

荒い鼻息が漏れ出ている。男のモノをしゃぶるといふのは、彼女の多分に漏れず知識として存在を知っているだけの行為だったが、これほどまでに楽しく、悦びを与えてくれるものだとは思っていなかった。彼女は今、異様なまでの性的興奮に包まれていた。それは、彼女の右手を動かす。両の脚の間、雨季のジャングルのようになったクレヴァスへ、再び向かっていく。

「おっと……手で慰めるのもいいが、もっといいものを使ったらどうだ？」

男が、指を鳴らす。ベッドの上に、張型が現れる。ちょうど先ほどまでの彼のペニスのように、上向いて天を指している。肉幹は太く精巧で、本来の男性のソレにはありえないイボがところどころにあしらわれている。

「あはッ——」

こういうものを使った経験は一応あるが、こんなサイズのもの初めてだった。指など比較にならないほどの快感をもたらしてくれるだろうことは、容易に想像がつく。

愛玩動物の頭を撫でるように、指先で軽くいじくる。いかなる手段によつてか、ソレはベッドに固定されているようだ。手に取つて抜き差しすることはできないだろう。つまり、自らその上に、腰を下ろせというのだ。ちようど、騎乗位でセックスするときのように。

腰を浮かせる。両脚を、下品なほどに大きく広げる。亀頭と秘貝とが、出会いのキスを交わす。それだけで、ぞくぞくとしたものが腰から背骨に抜けていった。

「ンふ——んんんウウツ！」

ぢゅぶん、あるいはぬぶん。泥沼に杭を打ち込んだような音がした。彼女は己の腰を、一息で下ろしていた。これほど興奮している状態で、玩具とはいえこれほど立派なものを膣穴にねじ込めばどうなるか、わからない彼女ではない。いやむしろ、わかるからこそ、知的探求心が、あるいは燃え上がる欲望が、実際に経験してみたいと訴えかけたのだった。

肉竿が、無数に備え付けられたイボが、膣肉を割り開き、ゴリゴリと抉る。その感覚は暴力的で、たとえばマスタースパークの直撃ほどに強烈な衝撃をもたらす。脳みその裏側、大事な大事な知識の宝庫が焼けているようにすら感じられたが、そのことに対しどうこう考えられるような余裕はなかった。

「んふつ、んんうツ、ンおツ、おつ、ンンンツ」

重量感のある腰が、上下にくねり始める。腹肉、尻肉が震え、乳房もぶるぶると揺れる。

うっすらかいていた汗が遠心力によって滴となり、飛沫となり、ぴ、ぴっとシートの上に散っていく。ぱっくりと口を開け張型を啜えこんでいた肉貝が、ぢゅぼぢゅぼと音を立て快楽を貪っている。ダンスというには見た目に重たいが、きわめて淫らな光景だ。

「ぢゆるっ、んぐぷっ、ぐぼっ、ぢゆる、んふうッ、おッおッおッ」

パチュリー・ノーレッジは、目の前の楽しみのために本来の目的を忘れるような愚か者ではない。自分が何をしなくてはならないのか、疑似性交の強烈な快感に溺れながらも、しっかりと覚えていた。つまり、フェラチオだ。タコのように唇を窄めヒルのように肉幹に吸い付きつつ、舌はイソギンチャクのようにうねり、亀頭を、エラを舐めまわす。

書でしか知らない行為を、彼女はどんな娼婦よりも情熱的に行っていた。ある意味では、当然だ。娼婦は、突き詰めていえば金のために性行為を行うものだ。けれども今の彼女は、金のためではなく、快楽のために口淫をしていた。意識が違う。

——本当に口淫のために、こんなことをしていたのだったか？ オナニーの快楽が思考回路を焼いている今、そんなことを思いだす余裕はなかった。とにもかくにも、ペニスに尽くし、快楽を貪る。それだけだった。

「お前もほかの連中と同じ、まるで盛りのついた犬だな。いや、体型からいったら豚か。なあ、どうだ、私のモノは。美味いんだろう？」

こちらを見る男の視線には、これまでは見せてこなかった明確な侮蔑が含まれていた。腹の底に隠していたのだらう。ただ今のパチュリーに、それに気づく思考力はなかった。嘲られて怒るところか、彼に感謝すらしていた。人に何かをしてもらったら、ありがとうと伝えるのは当然のことだ。こんな素晴らしいものをしゃぶらせてくれた上に、これほど気持ちの良い道具を貸してくれている。彼はいい人であるに違いなかった。

それを伝えずにはられないが、かといって口はふさがっている。ゆえに、せめてもの手段として、がくがくと首を縦に振る。こちらの反応を受け、彼は大笑する。

「そうかそうか！ それは何よりだな、雌豚が。まったく、まともな魔法使いがこうなるのを見るのは、いつだって最高の楽しみだな」

男はひとしきり笑い、そして真顔に戻る。

「だが、ヘタクソなのはいただけだな。勢いだけはあるが、それで精液を恵んでもらえると思ったら大間違いだぞ、豚が」

精液——ああそうかと、パチュリーは思い出す。それを味わってみたくて、自分はこのようなことをしていたのだったか。そして、それがもらえない。困惑する。自分の技術が至らないというのなら、一体どうすればよいのか？ 性技は、一朝一夕に——少なくとも今この瞬間に、ぱっと身につくものでもないだろう。

腹の奥に切なさを感じる。期待していたものが得られないかもしれないと知り、子宮がぐずり始めたようだった。ぐねんぐねんと腰をくねらせ、張型にあやさせるが、貪欲な女の器官は、それでもなお足りないかと駄々をこねる。

困り果てたパチュリーに、助け舟のように言葉が投げかけられる。

「安心しろ。お前のような女でも精を得られる方法を、この私が、直々に教えてやる」

願ってもないことだった。是非もなくうなづく——ことはできなかつた。それより先に、彼がこちらの側頭部を、両腕でがっしりと抱え込んでいた。

「ああ、あらかじめ言っておく。死ぬんじゃないぞ？」

「んぐ——ゴボツ!？」

帰りに卵を買ってきて。そういうことを告げるような、実に気楽な口調だった。だが、その次に繰り出された行為は、ひどく暴力的なものだった。

しっかりと抱えたパチュリーの頭を、彼は自身の体の側にぐんと引き寄せた。反対に、自分の腰は思い切り突き出した。結果どうなるかは、実に簡単なことだった。

肉の槍が、パチュリーの口腔を深々と貫く。猛々しい穂先は喉奥に至り、喉壁の粘膜を抉るようにして食道まで侵入する。

「が、ごえ」

聞き苦しい声、というより呻きが、喉の奥から漏れ出た。大きな衝撃の後に、剥がれた粘膜が悲鳴として上げる灼けるような痛みが襲い掛かってくる。目の端から、涙が溢れる。「ンンッ、いい締めりだな、この具合だと、喉は一度も使ったことがないとみえる。くく、ロストバージンおめでとう。せつかくの機会だ、この私が耕してやろうじゃないか！」

「ぐッ——オゴッ！ ぐえッ！」

食道を埋めていた侵略者が、やはり何の遠慮もなく、勢いよく引き抜かれていく。返しのように深く張り出した肉傘が、またしても粘膜を削っていく。ストレートのウオツカをあおれば、胸のあたりが燃えるようになるが、それよりもずっと強烈な感覚に襲われる。思わず、彼の太ももをばんばんと叩く。しかし、彼は笑うばかりだ。

「なんだ？ ああ、喉の開拓に代価を要求されると思っっているのか？ 心配するな、これは私からのサービスだ。代価などつまらんことは言わんよ、安心して受け取れ！」

「うぐえッ！」

抽送が始まる。ぐぶっ、ごぼっという、詰まったトイレを流すときのような音。ごり、ごりと、石臼をひくような音。みちみちと、肉が千切れるようなかすかな音。それらが、己の身体の中で響く。あわせるように、強烈な痛みが襲い掛かる。

「がくがくと、彼女は全身を痙攣させる。魔女も人外であり、純粋な妖怪と比べれば脆弱

であるとはいえ、頑丈な肉体をもつ。人間であればものを嚙下する機能が失われてしまいうような行為を受けても、堪えていた。けれども、感覚の方はそうはいかない。突如としてこの世界に現れた地獄に、嵐に巻き込まれた一枚の葉のように翻弄されていた。

ばつんばつんと、硬い肉同士のぶつかる音が石壁に反響する。彼の腹筋とパチュリーの鼻とが、抽送に合わせて何度も衝突しているのだ。それでも、のけぞることは許されない。彼はその針金を束ねたような筋肉の浮かぶ剛腕でもって、彼女の頭をがっしりと抱え込み、決して放そうとはしなかった。

「ゴッ、お、ごえ、ウグッ、お、オ、おおッ」

彼女は半ば、白目をむいていた。それは突如として叩きつけられた激痛の渦のせいでもあったが、それ以外にも理由があった。

酸欠だ。

口腔を深々と串刺しにされ、固形物の通過——ましてそれが激しく暴れまわることなど想定していないところまで埋められている状況だ。当然、呼吸などでできようはずもない。その一方で、許容量を超えた激痛は彼女の脳に普段以上に働くことを要求するのだから、酸欠に陥らないでいられるはずがなかった。

人間の脳は、苦痛が一定を超えると、もつといえれば死が近づくと、己を守ろうと感覚を

だまし始める。パチュリーは人間ではないが、脳にはちゃんとその機能が備わっていた。

快感が全身を満たし始める。口腔をモノのように使われ、ボロボロにされているまさに今、その苦痛をそっくりそのまま裏返したような快感が、脳に回り始める。

「んおおッ、おぐう、んおオ」

薄暗くなりつつあった視界が、逆に白く光り始める。ペニスの一突き一突きのたびに、鐘の音のように心地よいものが駆け巡っていく。

イラマチオが、こんなにも気持ちの良いことだったなんて。パチュリーは、そのような発見に、知的な興奮を覚えていた。今の彼女に、この快感が実際には脳の作り出す虚構にすぎないと看破するだけの思考力など、残されているはずもなかった。ともかく、彼女の探究心は、目の前の未知のものをもっと味わおうと持ち主に提案したのだ。

彼のピストンと腕の動きに合わせ、自ら髪を振り乱し、頭を前後させていく。喉を開き、自分から食道にソレを迎え入れる。快樂がより高まっていく。愛撫されたり、自ら慰めるのとは違う、より生命の根源に近いところにある快樂だ。危険な味のする法悦に、彼女は一発でハマってしまった。

ピストンのたびに、彼の陰毛の根元に、鼻先が埋もれる。すると、鼻道經由でどうにかこうにか肺まで流れ込んでいたわずかな空気が、濃密な雄臭を纏い始める。脳みそに強烈

なパンチを食らわせるような、刺激のある香りだ。雄の臭いと快樂とが、彼女の頭の中で結び付けられていく。

「おゴツ、ツゴ！ んぐう、ツぐ、んぐー！」

放埒な乳房が、余りまくりの肉が、ぶるんぶるんと揺れている。彼女の肉体はだらしないものであり、だらしなさは見苦しさと同時に、淫らさを生み出している。

淫らであるところの彼女は、再び大きく脚を広げ、腰を独立した生物のようにくねらせ始める。目的は単純で、ベッドの上で屹立している張型を、己の下の口でしゃぶるためだ。ぢゅぶツ、ぐぶんと、泥沼を掻きまわすような下品な音をたてながら、彼女の淫穴は張型を深々と啜え込み、性の悦びの享受を再開している。シートに円状にシミができていた。彼女の淫らかな蜜が作り出すシミだ。

「デカイケツを振って、こんなときにでもオナニーか！ はっ、なんだ？ わざわざ私が調教してやらなくても、もともと雌豚根性が染みついているのか？ 大したものだな！」

「ごツ、ごツ、んふうツ、んふう！」

しなにか言われていることはわかっていたが、そんなことに頭を回してなどいられない。なんといつても、ひたすらに気持ちがいい。頭も口も雌穴も、どこもかしこも快樂に満ち満ちていた。髪を振り乱し、腰を振り乱し、欲望を貪り続ける。偶然にも、鼻から抜けて

いく嬌声は、豚の鳴き声を連想させるようなものだった。

「まったく、滑稽だよ、お前のような魔女がそうなるのは、いつ見ても最高のお笑い草だ。いかに気取ろうとも、最後にはコレに勝てんのだよ——さあて、そろそろとびつきりいいものをくれてやる！」

とびつきりいいもの。ろくに回らない頭だというのに、その言葉の意味するところのものがなんであるかははつきりと理解した。

精液だ。射精するのだ。

パチュリーはそれに対し、迎え入れる準備を整え始める。彼女が今まで読んだ本では、フェラチオの最後に精を口で受け止めるというのは、当然のことという風に書かれていた。ゆえに、自らの行動になんら疑問をもつこともない。彼が揶揄した雌豚根性の正体とは、彼女の知識に他ならない。

れるれると口中で肉竿をねぶりまわしていると、肉棒にエクスタシーの兆候が現れる。抽送がさらに速くなり、幹はより一層膨らみ、巨木を思わせるものになっていく。最後の瞬間がいよいよ近いのだという興奮に、彼女の腰もより一層激しくうねっていく。豊満という言葉すら控えめに思えるような尻肉が波打ち、己の内部を埋め尽くす張型に、媚肉は悦びをもつてきゅうううと強烈に収縮する。

「そら、射精すぞ、射精すぞ、射精すぞ、オツ、オツ、オオっ——！」
「ングボツ、——ッ、ツオオオオ！」

そして、とどめの一撃が叩き込まれる。彼は思い切り腰を突き出し、逆にパチュリーの頭を、これまた思い切り引き寄せる。鼻先ばかりではない。額から唇にかけてが、下腹と衝突して密着する。そして、最後の瞬間が訪れた。

口中での爆発。それが初見の印象だった。実際それは、間違っていないなかった。限界まで膨れ上がったペニスという堤防が、とうとう決壊したのだから。尿道をさかのぼる奔流が、鈴口から体外へと初めて解き放たれた。濃厚極まる雄のエキス、男の欲望の象徴にして、まさにそのもの。精液。それが、彼女の口中へと放たれ始める。ごぶん、どぶんと、口中で音が響いているのをはつきりと感じた。口腔全てがペニスに埋められていたがゆえに、骨伝導によって射精音が伝わったのだ。

とたん、雄臭さが、口内に広がりはじめた。それは一連のフェラチオ・イラマチオの間にも感じていたのだが、比べ物にならなかった。今までののは、いうなれば物体に光を当て生まれた影のようなものだったのだ——影を投影する本体を、今まさに味わっているのだ。パチュリーにとつて不幸なのは、人生初の口内射精を、ゆつくり味わうことができないということだろう。なんならそれは、そもそも口内射精とは呼べないものだった。喉の奥

深くで解き放たれたそのほとんどは、そのまま直接食道へ、そして胃袋へと落ちていく。胃のあたりに、どっしりした重たさを感じる。無数の精虫が女を孕ませるべく放たれては、酸に焼かれ、彼女の血肉として消化されていく。

「オッ、ぐッぶオ、おごオオア」

肉付きの良い腰が落ちる。必然、張型は彼女を深々と刺し貫き、奥の奥に存在する器官の入口をノックする。甘い稲妻とでも称すべき、強烈な感覚が走る。

力強い射精と、凶悪な快楽。性の悦びのツープラトンの前には、わずかに堪えることも許されるはずがなかった。同時に知識と日陰の少女という二つ名に見合わない聞き苦しい嬌声——に聞こえないが——をあげ、彼女はアクメを迎える。背筋が反り、体が痙攣し、重力に従っていた乳房とはちきれんばかりの肉がぶるんと跳ねる。ほころびにほころんだクレヴァスから、ヨーグルトのように濃密な匂いたつ雌汁が音を立てて噴き出し、シートに彼女の香りを残していく。視界が白く光り、脳みそがばちんと弾け飛んでいったように感じられた。

「ウツ、ウツ、ぐううううお」

男はパチュリーのありさまを豚と称したが、こと今現在の彼女に対しては、その呼称は不適當だろう。醜さの例えとして豚という呼称が用いられるが、さすがの豚も、ここまで

醜くはない。また、豚という比喩がただただ見苦しいさまを表すのに対して、彼女はその見苦しさを、意識せずして淫らさとして昇華させていた。今の彼女は、淫らな肉塊だ。

「そら、おまけだっ」

長い長いペニスの脈動がようやく収まりはじめたころになって、男は不意にソレを口腔から引き抜いた。ちゅっぽおんと、ワインコルクを引き抜く音を水つぽくしたような音が鳴る。虐待に近い扱いをされてもペニスに必死に吸い付いていた唇が、モノと離れまいとしてたてた音だ。

亀頭から唇にかけ、粘液の橋が伝っている。粘膜の残骸と精液と唾液の混合汁が原料だ。男は射精の終わり際の、最後っ屁のような脈動数度によつて吐き出される子種を、彼女の顔面に垂れかける。額から瞼、鼻筋からおとがいにかけて、でろりと。パチュリーは舌を垂らした犬のような表情で、それを受け止めていった。

「ッは、ああ、あは、はへっ、ひい、ひい」

ぜいぜいと、肩を上下させ呼吸する。脳みそが、酸素を求めていた。肺へ流れ込む空気は、濃厚な精臭をまもっていた。顔面・口中・食道にぶちまけられた濁液から立ち上ったものが、吸気と混ざり合っているのだ。

アクメの余韻が彼女を苛み、覚まさせない。呼吸のたびに感じる雄臭にしてもそうだし、

なにより、腰が抜けてしまったせいで、いまだに張型に深々と貫かれているのが大きい。動いていないとはいえ、自重によつて奥の奥を刺激され続けている。甘やかな感覚が延々残り続けていた。それは彼女の官能の火を、いつまでも燃え上がらせる。

「あはあ……ッ」

「気に入ったか？ 気に入ったようだな」

にやにやとした笑みを浮かべながら、男が尋ねてくる。答えるまでもないことだった。知識をもっているのと経験したことがあるのでは、時として天地の差がある。知の探究に何より関心をもつ彼女であるからこそ、そのことを重々承知していた。

性行為もまた、そういったものの一つであるようだった。身を焼き焦がすような快感は、どれほどの言葉を尽くしても、どれほどの図を用いても、伝えきることのできるものではなかった。ゆえに、それを教えてくれた彼にパチュリィは深く感謝していたし、この後に待ち受けているであろうさらなる行為——性交を、心待ちにしていた。

「よし、では終わりだな」

「……は？」

そのため、彼の発言の意味を汲み損ねた。ただ、それが自分にとってよくないものだという予感だけは、強く感じた。

「代価はいただいた。では契約を履行しようか。必要なのは知識だったな？」

「え、ちよ、ちよっと待って？」

「なんだ？ まさか今さら私を送り返すつもりじゃないだろうな。代価が物品なら戻して契約破棄でもよかるうが、行為だからなあ。したことをなかつたことにはできまいよ」

「そうじゃなくて……その、これで終わり？ 続きはしないの？」

何を言っているんだ？ というように、男は眉をひそめた。いよいよもって、嫌な予感が強まる。

「続き？ それは……ああ、もしかして、セックスのことか？」

「……そ、そうね、セックスのことよ」

そのものずばりの言葉を述べるのはいささか躊躇われた。男は相変わらず、なぜそんなことを尋ねるのかと言わんばかりの態度でいる。

「不要だろう？ もう一度言うが、代価はもらった。これ以上は不要だ」

「だって、私を抱くって話でしょう」

「おいおい……これだけ立派な陣を描く魔女なのだから、契約内容くらいはきっちり認識していると思つたんだがな。いいか、私は抱かせるなどは一言も言っていない。性行為をしてくれと言つたんだ。さっきのも性行為だろう？ 契約成立には十分じゃないか」

「そんな」

そんな、話が、あるか。

ここまできてセックスがないというのは、スープまで出てきたのにポワソン以降がないフルコースのようなものだ。いや、空腹なら最悪なにか別のものでも食べればいい。だが、疼く肉欲というのは、代替手段でもつては決して慰められないものだ。彼女にはそういう確信があった。だから、抱いてもらえないとなると、困る。

しかし、説得、あるいは誘惑が無意味であることも、彼女はよく知っていた。悪魔は、望みに対する代価を厳密に定めている。それは割引がないことを意味し、割増がないことも意味している。ついでに抱かれてもいいと伝えたところで、彼は乗り気であるか否かにかかわらず、固辞し続けるだろう。悪魔にとつての契約とは、そういうものなのだ。自分は今、こんなにもセックスに飢えているというののだ。

で、あるなら。

彼女には名案があった。彼に確実に抱かれることのできる方法を知っていた。実行には大きなリスクが付きまとう。だが、それがどうしたというのだろう。砂漠で迷い、脱水で死にそうであるときに、目の前に泉が現れたとしよう。水が汚染されているかもしれないなどと、考えていられるだろうか？ そんなことは、飲んでしまっただけから考えることでは

ないのか？

「そ、それなら、もう一つ、追加で契約しましょう」

「ほう？ 構わんが」

喉がひどく渴く。白濁まみれになっているからでもあるが、何より心理的な緊張がそうさせていた。粘つく口中を唾液でどうにか湿らせ、言葉を続ける。

「わ、ッ、……私を、抱きなさい」

(体験版はここまでです)